

寺 報 善 巧

発 行
〒 938 富山県 下新川郡
宇奈月町 浦山 497
白雪山 善 巧 寺
TEL・FAX (0765) 65-0055
TEL オテラザ 65-0975

生かざるいのち尊し
けさの春
今年もよろしく 法輪寺
善巧寺
照行寺

一七〇 十七夜勉強会
二二〇 花の会
三二〇 雪ん子防波公演

御正念報恩講
一三〇 昼二時 速夜
一四〇 昼二時 速夜
一五〇 一三時 お講・下村
一六〇 一三時 お講・浦山
一七〇 一三時 満座
一八〇 一三時 満座
一九〇 一三時 満座
二〇〇 一三時 満座
二一〇 一三時 満座
二二〇 一三時 満座
二三〇 一三時 満座
二四〇 一三時 満座
二五〇 一三時 満座
二六〇 一三時 満座
二七〇 一三時 満座
二八〇 一三時 満座
二九〇 一三時 満座
三〇〇 一三時 満座
三一〇 一三時 満座
三二〇 一三時 満座
三三〇 一三時 満座
三四〇 一三時 満座
三五〇 一三時 満座
三六〇 一三時 満座
三七〇 一三時 満座
三八〇 一三時 満座
三九〇 一三時 満座
四〇〇 一三時 満座
四一〇 一三時 満座
四二〇 一三時 満座
四三〇 一三時 満座
四四〇 一三時 満座
四五〇 一三時 満座
四六〇 一三時 満座
四七〇 一三時 満座
四八〇 一三時 満座
四九〇 一三時 満座
五〇〇 一三時 満座
五一〇 一三時 満座
五二〇 一三時 満座
五三〇 一三時 満座
五四〇 一三時 満座
五五〇 一三時 満座
五六〇 一三時 満座
五七〇 一三時 満座
五八〇 一三時 満座
五九〇 一三時 満座
六〇〇 一三時 満座
六一〇 一三時 満座
六二〇 一三時 満座
六三〇 一三時 満座
六四〇 一三時 満座
六五〇 一三時 満座
六六〇 一三時 満座
六七〇 一三時 満座
六八〇 一三時 満座
六九〇 一三時 満座
七〇〇 一三時 満座
七一〇 一三時 満座
七二〇 一三時 満座
七三〇 一三時 満座
七四〇 一三時 満座
七五〇 一三時 満座
七六〇 一三時 満座
七七〇 一三時 満座
七八〇 一三時 満座
七九〇 一三時 満座
八〇〇 一三時 満座
八一〇 一三時 満座
八二〇 一三時 満座
八三〇 一三時 満座
八四〇 一三時 満座
八五〇 一三時 満座
八六〇 一三時 満座
八七〇 一三時 満座
八八〇 一三時 満座
八九〇 一三時 満座
九〇〇 一三時 満座
九一〇 一三時 満座
九二〇 一三時 満座
九三〇 一三時 満座
九四〇 一三時 満座
九五〇 一三時 満座
九六〇 一三時 満座
九七〇 一三時 満座
九八〇 一三時 満座
九九〇 一三時 満座
一〇〇〇 一三時 満座

寺 一月
一 修正会 年頭参り
二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一



安藤徹カメラマン撮影による大銀杏樹全景

明けましてお目出度うございます。旧年中は色々御世話になりました。本年も相変らずよろしく願います。

毎年のお正月に百五十人ばかりの門徒衆に、年頭のごあいさつを申し上げます。紋切型な言葉ではありませんが、本堂の阿弥陀様に御挨拶を済ませて、集会所に

いる私のところに来て下さる皆様方に、一人一人御あいさつ出来る私を住職として何よりの幸せと思っています。

善巧寺では正月三日間、晨朝のおつとめに、往生礼讃をあげることにしています。

今日は、この礼讃のことをお話し致します。沙門善導集記とあるように、此の本は、善導和尚が書かれたものです。善導と云えば、皆さんも覚えがある筈です。お正信偈をあげていて、途中声を張り上げるところがあるでしょう。「ゼンドウドクミョウブッショウイ」此のゼンドウが善導大師のことで、浄土について内外の学者たちのなかで善導ひとり仏の正意を明かにした

往生礼讃

ことを言っているのです。善導大師は中国隋の時代に生れ、唐の永隆二年六十九才で入寂されました。堂に入ればすなわち合掌し、跪いて一心に念仏し力がつきねば休むことはありませんでした。寒冷の時期でも汗が流れて出るほど称名念仏をばげんだ人です。

西方極楽世界の阿弥陀仏に南無したてまつる。願わくば衆生と共に咸く帰命せむ 故に我頂礼して彼の国に生ぜむ 阿弥陀様の名を称えて、極楽世界に行くのだぞと繰り返して居られます。

弥陀経及び観経にいわく、彼の仏の光明は無量にして十方国を照らすに障礙する所なし 唯念仏の衆生を觀そなわして攝取して捨て給わざるが故に阿弥陀と名づけたてまつる。

元旦、善巧寺の阿弥陀様にこあいさつなさった御門徒の皆さんを、攝取してお捨てにならない仏のみ心を、平成五年と云う新しい年を迎えて、心に留めようではありませんか。

住職 雪山俊之

阿彌陀

花

五百年五十年法要記念講演

(最終回)

行信教教授 梯 實 圓 師



私はシャンカラと違ひまして「大無量寿経」の教えによつて、この阿彌陀さまの本願のお心によつて、「お前は何者だ」と言われた時には、「私は阿彌陀さまの子でございます」と即座に答へさせていただきます。あなたたちもそうしたらどうですか。如来さまは私たちの一人一人を「一子」のように、かけがえのないひとりの子として私たちを念じてくださる。その思いがあの本願の言葉となつて表われてきている。お経には如来さまは「衆生をみそなわすこと一子のごとし」「まさに知るべし一切の衆生は如来

の子なり」とおっしゃっている。ご開山はこの言葉を「教行証文類」の信文類に引用してある。「如来は衆生のために慈父母となりたもう」如来さまは慈しみ深い父母となつて私たちの前に立つていてくださる。「まさに知るべし一切の衆生は如来の子なり」皆仏さまの子なんだよ、如来さまから大切な我が子よと呼び掛けられている仏さまの子なんだよ、とご開山はおっしゃっています。私はこのご開山の指示に従つて、「お前は誰だ」と言われたら「私は阿彌陀さまの子だ」と言わしていただくことにしています。死んでも、阿彌陀さまの子ならどこもよそへは行きません。阿彌陀さまの国に生まれさせていただく、阿彌陀さまの世界を我がふるさとといひきらしていただくことができます。私はお浄土から来たわけではあ

りませんが、親のいますところが、私の帰るべき故郷なのです。それが如来さまの本願の言葉に逢つた人の喜びなんでしょうね。私は阿彌陀さまの子として、阿彌陀さまの大悲を宿されて生きさせていたでいる、そういうものなんだ、と自分の存在を、生きていることの意味を確認していくことです。

阿彌陀さまから大切な我が子よと言われている存在なんです。大事にしましょうよ。年がいつてもう私みたいなもんが生きててもなんの役にもたたん、早くお迎え来んかいなという人がいるけれど、そんなこと言いなさんな。役に立つものが立つまいが、そんなことは関係ない。なんの役に立たなくつても、如来さまは私の命に向かつてお前はかけがえのない大切な仏の子なんだよ、こう呼んでくださるんだ。私たちは如来さまからやがて仏の徳を実現する大切な仏の子なんだよと言われていることに支えられながら生きさせてもらいましよう。世の中のすべての人からお前みたいな奴は死んでまへえといわれたつて、大きなお世話だ、私が存在していることは如来さまによつて認められているんだ。こう言わしてもらいましようや。如来さまによつて認

められている人生を大切に生きさせてもらうんです。その意味で自信を持つて生きさせていただきましよう。「煩惱具足の凡夫」というのは、どうにもならん悪い奴だ、ということと違います。ごみと違う、ただ悪いだけだつたら、ただのごみだつたら、捨てりゃあいいんだ。しかし、仏さまは私を捨てられんとおっしゃつた。「苦悩の有情を捨てずして」とおっしゃつた。大切な我が子であるから如来さまは捨てられんとおっしゃつた。如来さまからは如来子といわれているものでありながら、しかし私たちは仏さまの子らしい生き方しとるか、というたらいさうにそれらしい生き方ができてるらん。仏さまに背中向けて悪魔に魂を売つたような浅ましい日暮ししかしてない、そのことの申し訳なさを、「煩惱具足の凡夫」というのです。仏の子が仏の子らしからぬ生き方をしていることを申し訳ございませんと慚愧している。それがこの言葉です。ただつまらんもんだ、というのとは違う。これを間違わないようにしてください。私たちは如来さまから大切なものとして、如来さまにその存在を承認されているものなんだという事です。

そして、この仏さまの子として生きる私は、阿彌陀さまの世界へ、限らない命と光の世界に向かつて歩みを運ばしていただいている人生であるといひきらせていただくことができます。こう言わしていただける心の視野を開いてくださるのには、この本願のお言葉ですね。「お願いだからほんまに疑いなく私の国に生まれることができますと思つてくれよ」という如来さまの言葉を受け入れることによつて開かれるわけです。この如来さまの願いを聞き入れさえすればいい。話はそれでけりがつく。「私は何にもわかりませんけれども、あなたのお言葉のままにあなたの世界に生まれていく人生であると思ひ定めさせていただきます」とこう仏さまの仰せをすいと受け入れたらその瞬間に仏さまは、そうかお前私の願いを聞き入れてくれたか、それじゃもうお前も私の仲間やで、とおっしゃつてくださる。私たちはこの瞬間から仏さまの仲間として生きさせていただくんですよ。それを親鸞聖人は「正定聚に在る」と言われたんです。仏さまのお言葉を如来さまの願いを聞き入れて、自分の人生を思ひ定めていくものが仏さまのお弟子でございます。真の仏弟



子でございます。仏弟子というのは、どんな生き方をしているかではなく、仏さまの願いを聞き入れたかどうかで決まるんです。もう、ことわりを言わんようにしましょう。仏さまの言葉、願いのままに、あなたの世界に生まれさせていただきますとこういただく。その瞬間に私たちの人生の方向が決まる。方向が決まった瞬間に私たちは放浪者じゃない確実な方向に旅をする者となる。浄土に向かう旅人になる。旅人というのは、方向が決まって行く先がわかっているから旅人なんです。行く先が決まっていなかったら放浪者だ。人生を放浪者として終わるか、それとも帰るべき命のふるさとを約束していただいて生きるか、これはこの仏さまの仰せを聞き入れるかどうかの問題です。信心というのは、この仏さまの仰せをはからいなく聞き入れることなんです。如来さまの言うことを聞くことなんです。親鸞聖人は、はからいなく仰せを聞けよ、聞き入れよとおっしゃっておりますから、仰せのままにお

浄土に生まれさせていただく、こう思い定めさせていただく。考えてみたら私たちはこの世に生まれてきた時、何にも知らなかった。何の予備知識も与えられないまま、この世に生まれてきました。どこぞこの家に生まれるかと思っただけで、生まれたくないでしょ。気が付いたら生まれてた。何しにきたのかもしらん。生まれたことも後になって分かった。そんなものでしょ。そして、こうしろあしろ、こうでもないあでもない、と言われるうちにここまで育った。そのうちにふと気が付いたらもうお前の持ち時間終わりやで、というようなことになるんです。その時に行く先が決まっていなかったら、これは大変なことです。この命、いざこより来ていざこに去っていくのか何もわからない。実はこれが私たちの本音でございます。何一つ知らされないそのままこの世に生まれてきた、これは大変なことですよ。ジャンポール・サルトルという哲学者がおりまして、彼は人間ていうのは投げだ

されたようにこの世へ生まれてくると言っておりますが、まさにそうでしょうね。私だけわかんのか、と思っただけでもない。あの有名な弘法大師もわかんといわれている。この方は頭の良い人でね、「行くとして可ならざるなし」何をやらしても超一流、という人物だった。あの方の書物を読んでも、才気煥発という確実にすごい頭脳の持ち主だったと思うんです。その弘法大師の書物の一つに、「秘蔵宝鑑」というのがある。その序文に「生まれ、生まれ、生まれ、生まれて生の始めに暗く、死に、死に、死に、死んで死の終わりに暗し」こういう言葉があります。この命いざこより来ていざこへ去っていくのか、何もわからない、ただ茫漠とした命を今こうして営んでいる。身震いするような思いがしますな。そんな私が、仏さまのお言葉によって仏さまの教えによって、自分の命の生きている意味と方向を聞き定め、見定めたいと思うんだ、というのでこの書物を表わされているわけです。

しかし、大師は「金剛頂経」や「大日経」といったお経の中に、自分の命の方向を聞き定め見定めようとされていた。私は親鸞聖人のみ教えに従って「大経」に示された阿彌陀さまの願いの言葉の中に私の生きる意味と方向を聞き定めさせていただこうと思う。私の命には、如来の願いが宿された命なんだ。そしてこの命は如来さまの世界に向かつて歩みを運ばさせていただいている。やがて訪れる死はむなしい滅びじゃなく、永遠の命の中に帰っていく。永遠の生である。と言われるような自分の人生の意味と方向、それを本願のお言葉の中に聞き定めさせていただくのでございます。こうしてご縁に逢わしていただいて、そして阿彌陀さまの本願をずーっと受け継いで伝えてくださった多くの方々、御化導の伝統をいただきながら、私もまたあなた方と同じ世界へ生まれさせていただきま

す。前と後ろとの違いはあっても同じ所で逢わしてもらいます、こういうことがスバツと言えるみ教えを与えていただいたということは、本当にありがたいことですね。ちょうど、お時間になりましたのでこれでお話を終わらせていただきます。

(六)





会えてよかった

浄土真宗本願寺派前お裏方

大谷 嬉子様

隆弘さんがお浄土にゆかれたのは、ついこの間のように思われますのに、十月には三回忌の御法要がいとなれます由、月日の流れの早さに驚くばかりであります。

演劇好きのお二人が結ばれたことによって、演劇を通じて新しい伝道の方法が必ずや確立されるものと、期待しておりました。その矢先の隆弘さんのご往生。ただただ残念でなりません。何年前になりますか、たしか富山の五箇山で保育連盟の全国大会が開催されました。民宿の広間のようなところであったと思います。隆弘さんが主催される「雪ん子劇団」の皆さんが、「うちのとうちゃんえらいんだ」という劇を上演されました。人間の心はこうあらねばならないと

「タリフジ」時代。

「若」時代。

そして「斗病」の時代。

生き方と死に方の先輩です。

永六輔氏

いう心のもち方、その大切さが、演じる子ども達と、見物する者の頭に極めて自然に理解出来る劇でありました。お説教がましいところのないのが、作者の苦勞されたことではなかったかと想像しています。

お寺が劇場になつてもよいではありませんか。立派に伝道の役目を果たすのですから。

何としても、隆弘さんの短い生涯が惜しまれてなりません。又とない協力者であった玲子さん。独り残されて劇団の運営に当たられるのは、苛酷とも思われますが、必ずや、仏さまとなられた隆弘さんの、目に見えないご援助のあることを信じております。

最後に、大変なお仕事とは思いますが、遺稿となった、仏典劇本「観無量寿経」が、善巧寺のご本堂で上演される日の、遠くないことを念じつつ筆を擱きます。

父の三回忌にあたって

雪山 俊隆

父が亡くなり、はや二年が経ちました。二年経ったとはとても思えません。なぜなら、私の心の中では、そして我が家では、父は生きつづけているからです。中学三年のちょうど受験期の頃、

父が亡くなり、はや二年が経ちました。二年経ったとはとても思えません。なぜなら、私の心の中では、そして我が家では、父は生きつづけているからです。中学三年のちょうど受験期の頃、

父が亡くなり、はや二年が経ちました。二年経ったとはとても思えません。なぜなら、私の心の中では、そして我が家では、父は生きつづけているからです。中学三年のちょうど受験期の頃、

父が亡くなり、はや二年が経ちました。二年経ったとはとても思えません。なぜなら、私の心の中では、そして我が家では、父は生きつづけているからです。中学三年のちょうど受験期の頃、

はそこなんだよ。一番身近にいた人が待つてくれている世界に私も帰れる。そういう心がもてれば、これが最も、安心、ということだ。これに安心できなかったら、人生に安心はない。」

これを聞いて私は、仏教に対する考えが変わりました。まさにこの時、父の伝道が私に伝わったのだ、と今思います。しかし、まだ仏教、お浄土に対しての疑問はなくなりませんでした。

父が亡くなり、私の人生への考えは少しは変わったものの、私の生活が言うほど変化がなかったことを、今では恥ずべきことだと思っています。

私は平安を卒業した後、中央仏教学院に入りました。仏教にかなり興味をもち始めました。一学期が終わり、夏休みに入つて、私は、従兄である常見寺の長男、利井唯明君に誘われて

龍谷大学・普賢先生と行く、シルクロードと敦煌の旅”に行きました。旅行中のある日、酒の席で、学院生の一人がこう言ってくれました。「父ちゃん亡くなったけどがんばれよ。また会えるよ。」――また会えるよ――とさりとて言ったこの言葉に、私はとても感動しました。涙があふれました。その夜、唯明君と宗教、仏教について語り、また

父が亡くなり、私の人生への考えは少しは変わったものの、私の生活が言うほど変化がなかったことを、今では恥ずべきことだと思っています。

いろいろ聞きました。

八月三十一日、この日は私にとつて、まさに人生の転機であつたと思っています。宗教、お浄土とは、我々の頭ではとうてい理解できるものではないのです。お浄土があるとかないとかは、理解するものではないのです。疑いなど持たずにただ信じて、それをささえて生きてゆくべきなのです。個人個人いろいろな考え方、生き方があるでしょう。しかし、少なくとも私は、父の三回忌にあたって、こう感じさせていただいています。

我が家では今、なんとか家族みんなで力を合わせて、がんばっています。しかし現状では、父のいた頃にくらべると、四苦八苦と言ったところですが、皆さんの皆さんが支えてくださっています。雪山の名にはじめよう、がんばってゆきます。

我々は必ずお浄土に帰らせてもらえるのです。またあの父の笑顔が見られるのですよ。うれしいですよ。最高のささえておられるのですから。

生きている間は生きている。すばらしい人生だったね、と言えよう。人生をつくつてゆきましょう。ブッドバイ――みほとけと共に――

教えられた「死に方」

脚本家 多地 映一氏

雪山隆弘氏とは十年余りの付き合い合いました。西本願寺企画・制作のアニメーションビデオ「仏典物語」「念仏物語」の仕事を通じてのことでしたが、氏の人の活達さ、話題の豊富さ、各種活動の多彩さに魅了され、仕事を離れても長くご交際頂けると楽しみにしておりました。氏のご往生でその望みは失われたものの、面影は少しも色あせず私の脳裏に焼き付いたままです。

うとしておられるのだな」と思いました。そのすさまじさに圧倒されるとともに、その心意気に深い感銘を受けました。

（私も、死を間近にした時は、このようにふるまいたい）と願いました。そしてこの日が、氏のお姿の見納めとなったのです。それから三年めの今年。

私もまた、氏と同じ病を發し、胃その他を除去する大手術を受けました。退院後の現在も制ガン剤の治療を続け、転移・再発を警戒しながらの毎日です。氏に教えられた「死に方」を実行する時が、思ったよりはるかに早くやってきたのです。

とりわけ鮮明な思い出は、「念仏物語シリーズ」の構想を伺うために、西本願寺出版部の方々や、制作会社ビジュアル80の石黒光一社長とともに善巧寺へ参上した折のものです。八月の富山は三十六度を越す猛暑でした。その中で、すでに再発した病気の末期を迎えておられた隆弘氏は、見違えるほどやさしくお体にもかかわらず、雪ん子劇団の指導、電話によるラジオ出演、会館の新築計画、さらに私どもの打ち合わせと、それこそ阿修羅のごとく大活躍をなさっておいででした。

（残された命を精一杯生きよ

「死に方」は裏を返せば「生き方」でもあります。私は生活のための仕事をすべて打ち切り、かねてからやりたかった仕事だけを、一作々々が文字どおり遺作のつもりで、二十キロも体重の減った体に鞭打ちながら書き進めております。中途で倒れるならばそれもよし。迷いはありません。後悔もありません。生まれて初めての充実した毎日です。

そして、このような「生き方」を身をもって教えて下さった雪山隆弘氏に、言葉ではとても言い尽くせぬほどに感謝いたしております。



YKK国際会議場での雪ん子(上)と女先生(下)



十一月一日、石川県小松で開かれた第七回国民文化祭・全国児童演劇祭。板津中学の「勸進帳」京都やまびこ座の「どろぼう学校」石川県さくらんぼの「十一匹のネコ」愛知県杉の子の「雪わたり」西町子供歌舞伎「義経千本桜」そして雪ん子の「うちのとうちゃんえらいんだ」が上演されました。雪ん子たちは大いに刺激をうけ、がんばるぞという力をみなぎらせて帰ってきました。

今日は素晴らしいお話と子供たちの劇をありがたうございました。

感動しました。思わずきたない字もかえりみずこのことをお伝えしたくてペンをとりました。私も17年生れです。

「会えてよかったね」の言葉をかりるなら「聞いて見てよかったね」です。感動のさめやらぬままに一言お礼まで

かしこ

須田開代子さんを迎えて

10/27

『お寺座トークショー』

十月二十七日夜、プロボウラー須田開代子さんと瀬川昭子、久美さん親子を迎えて『お寺座サロン』が開催され、百人ちかい観衆は楽しいお話と、銘菓をおいしく味わいました。



富山では十一月二十一日午前放送されたテレビ番組『生きた』はTBS系の全国各局で放送され、各方面から反響がありました。

大阪の放送映画製作所からプロデューサー、カメラマン、音声の三人の取材班が、二泊三日

で取材。雪ん子の練習風景、『お寺座サロン』のトークショー、インタビュー等、まわしたテープは十時間にもおよびますが、放送は十五分間。花の会や雪ん子など、がっかりした人もおいでかもしれません。ごめんなさい。

十二月十一日 金曜 早朝より雷風・雨の荒れ模様。昨日は又暖か過ぎた。下村の葬式は無事に済ませて寺に帰った時は、数人掛りで朝からはじめていた銀杏樹の夥しい落葉の清掃が終わったところだった。これで、本堂の雪囲いも庭木の雪吊りも完全に終わって、雪を迎える準備は出来ている。雪国に住んでいると、今年の雪がどうしても気になる。此処数年、暖冬が続いて雪の心配から遠ざかっていただけに、今年はどうだろうか、テレビの長期予報を見ても、年末に大雪かなどとのニュースに一喜一憂する。

八時半寺詣の一行来寺。昨日の葬式のお寺詣り。十人。「往観傷」をあげる。仏は八十八の祝いを終えて大往生をとげた人。長い間地方鉄道に勤務していた働き人だった。参詣人も多く、好天にも恵まれたいい葬式だった。

八十代の老人が一人又一人と亡くなって行くのは寂しいものだ。寺報の原稿を書くため机の前に座る。娘は報恩講廻りに出かけたし、妻は台所で何かして



住職日記

る。外の雨は止んだようだが、庭の杉はざわめいている。部屋のストーブの音がかすかにひびいている。何となく気が落ちつかぬ。机の上には、来年の日記帳と、正月号の雑誌が三冊置いてある。その横に目薬がある。カタリンK点眼用、老人性白内障治療剤である。毎食後服用している錠剤七錠が、包みになって、ケースに入っている。薬の厄介になるようになってからでも、十何年になる。あれや

これや、つまらぬ思いに耽っている間に、昼食の時間になる。食後の蜜柑が美味しい。雪ん子の子供達へもと遠く広島から沢山送って下さったもので、此処数年毎年の恒例になっている。子供達はみかんのおぼさんと呼んでいるが、瀬戸内海の蜜柑島の所有者である。日本中のあちらこちらに、雪ん子ファンがいっぱいあって便りを下さっている。夕食は、鰯のたたきと、出から頂いた連根。入浴を終わって肩こりの薬を貼る。

空葉忌や御徳高し秋日和
裏山の稚木紅葉の色深む

寺
こよみ

二月

一日 お講・浦山

三日 三日市・報恩講

六日 白鶴会新年会

九日 生地・荻生・報恩講

一〇日

一六日 お講・下立

一七日 音沢助成会

一八日 下立・報恩講

一九日 舟見・報恩講

二〇日 雪ん子富山柳町小公演

二二日 入善・泊・報恩講

二四日 板屋・熊野

二六日 浦山・報恩講

寺
こよみ

三月

一日 お講・浦山

二日 浦山・報恩講

七日 雪ん子岐阜別院公演

一〇日 太子会

一六日 お講・板沢

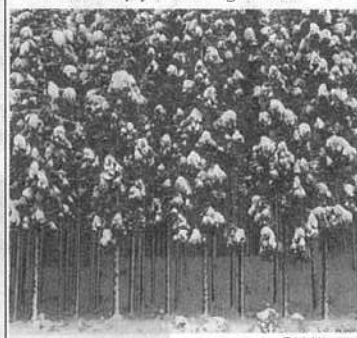
一七日 十七夜勉強会

二〇日 教化推進協議会

二八日 雪ん子春の定期公演

しらじらと
あけそめし
けさのしずけさに
いかされてる
よろこびを
する

In the quiet of dawn
as the sky begins to whiten,
I know the joy of sharing in life.



1 1993 平成 5 年						
日	月	火	水	木	金	土
					1 4日	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24 31	25	26	27	28	29	30

年頭告知板

お誕生祝い お寺では明治・大正生まれの方々に、お誕生日のお祝いの便りを差しあげております。小冊子とお祝いのメッセージだけでなく、みなさんにとってもよろこんでいただいております。

昭和五十三年五月から続けているのですが、それでもまだ、名簿のつけ落としなどがあるようです。明治・大正生まれの方でまだ誕生日にお祝いが届かない方がありましたら、ご一報ください。よろしくお願いいたします。



結婚祝い

新婚さん、おめでとうございます！お寺からもお祝いをさせていただきます。

夫婦念珠と隆弘師の著書をプレゼントいたします。



おめでとうございます 途上国で公使、発展に寄与



「発展途上国の発展に少しは寄与できた」と思つた19年以上にわたつた外国生活振り返る佐々木さん

勲二等瑞宝章

元シバエ
特命全權大使
佐々木 正賢氏(88)
東京都世田谷区上馬

オーストラリアなど五カ国で公使などを務め、定年まで月に数回は成田に外国はシバエの特命全權大使に。受章の感想は「とてもありがたいことです」。宇京大法学部を卒業、外務省に入社した。終戦直後の九月、六十年に退職するまでの三十九年余りのうち、ほぼ半分が外国暮らし。援助などの面で懐かし

御正忌報恩講に必ずお参りを 13・16日

宗祖親鸞聖人の祥月法要で、聖人の遺徳を偲びつつご恩徳に報謝するもので真宗門徒にとって一番大切な行事です。一月十三日から十六日まで執り行いますので必ずおまいりください。十五、十六日はお斎がです。

今年のご講師は、福井勝山市本町の西宮寺住職・三寄靈証師にお越しいただきます。三寄先生は、行信教校のご出身で、福井では大変な人気の方です。お誘い合せ是非お参り下さい。

善巧寺の常例行事

お寺の学校 毎月一日・十六日
お寺の学校 正月春盆暮れ
雪ん子劇団 毎週 月曜四時
花の会 毎月第一火曜日
十七夜勉強会 毎月十七日夜

合 掌

みなさまおすこやかに新年をお迎えのことと存じます。

この十六日で八十二才になる老住職は現役で法務をつとめており、その住職を支える坊守は公私ともにますます盛んです。若坊守は悲しみを笑顔でかくしながら、ひたすら忙しく過ごしています。長女有花は、昨年十月からKNBラジオで週二日のワイド番組を担当、お寺の仕事共々いろいろ学ぶ所多いようです。長男俊隆は、明教院の直系としていよいよ父について行信教校で空華を学びはじめます。

二男教隆は、龍谷大学真宗学科に合格、四月からは兄弟揃って仏教の学徒となります。

法輪寺・高島さん、住職夫妻は跡取りも決まり、安心して二人だけのスイートホームを楽しんでいます。

照行寺・神子さんは、若はん巧さんが門徒報恩講、連研と、もうすっかり一人前、あとはお嫁さん待つかかり。東京で新婚生活を送る長女一英さんがお産の為お里帰りでにぎやかな新春です。

今年もどうかよろしくお願ひ申し上げます。

